

# 老舎研究会会報 第10号

胡絮青女士 題字

## 舒濟女士の二つの研究発表

1989年は相繼いで老舎の長女舒濟女士と子息舒乙氏（林原財団の招請による）をお迎えし、たいへん忙しい一年であった。

舒濟女士訪日は老舎研究会の詔請と、会員諸兄姉の資助により実現した。7月11日から8月6日まで滞在し、東京、名古屋、京阪神戸等の地で会員の歓迎を受け、中京大学で行われた老舎研究会及び東京で二度研究発表をされた。女士は1981年以来「老舎文集」の編集刊行に尽力されており、近く「老舎書信集」として出版の予定である。研究発表はその編集の中から得られたことをまとめられたものである。

女士は折あるごとに訪日実現に心から感謝の意を述べておられ、この誌上を借りて会員諸兄姉にお伝えする。

### 研究発表概略

一、従「一家代表」到「茶館」（7月15日、於中京大学）「一家代表」「茶館」「秦氏三兄弟」をめぐる問題につき見解を述べられた。

「一家代表」（1951、10～11月）

「柳樹井」（曲劇、1952、1月）

「生日」（1952、2月）

「春華秋実」（1952、2月着手、改筆十稿に及び、53年5月発表）

「大家評理」（歌劇、1953、2月）

「西望長安」（1956、1月）

「十五貫」（京劇、同名の古典戯曲を改編、1956、7月～9月）

「苹果車」（翻訳劇、バーナード・ショーの同名の政治劇全文を翻訳、1956、7月）

「茶館」（1957、7月）

これらのドラマはいずれも法治精神を強調し、封建的婚姻や家庭生活、あるいは社会的、経済的犯罪を描き、それらの問題が法を以て公正に解決されたことをたたえている。現実の社会に起きた具体的な事態に触発されて問題として採りあげドラマ化したのである。生前未発表のドラマ「秦氏三兄弟」は1900年代前半世紀の革命をたどり普通選挙実施と憲法制定による人民の権利の保証、国家富強を全編を通して主張している。この点は上にあげたドラマと共通する所がある。

かつて「茶館」の成立について、老舎は「ドラマ『人民代表』を書いたが破棄し、その一部分を『茶館』第一幕に用いた」と述べている。また、この言葉を証明する発言をした人もいる（焦菊隱）が、現在「人民代表」の原稿は発見されていないし、勿論発表もされていない。「秦氏三兄弟」の原稿が発見されたとき、この原稿は「茶館」と表書きした大封筒に入っていたこと、第一幕第二場は「茶館」第一幕前半と同じであることから「茶館」が「秦氏三兄弟」から発展したものであることは疑いない。内容から見て「秦氏三兄弟」は人民代表に直接関係はないが、普通選挙による代表選出を主張するドラマの主旨は人民代表に通じる要素がある。老舎も人民代表の経験があり、「秦氏三兄弟」の創作には初期（執筆時期は1956年後半から1957年初頭）に於て人民代表をテーマに構想していたのかも知れない。「一家代表」は「人民代表」とは無関係である。「茶館」は「一家代表」以後のドラマ諸作と老舎の体験の総括と言うことができる。

二、老舍書信及其書信集（7月29日於大東文化會館）

老舍の書信は残っていれば二千通を超えるであろう。かつて羅常培氏は老舍からの書信500通余を保存していた。南開中学時代の同僚趙水澄氏は300通余を、趙家璧氏も上海晨光出版社で出す予定であった「老舍全集」について200余通をもらい保存していたというが、すべて文革中に消失した。アメリカではJune Rose Garrott女士、Bernard R. Crystal 氏らの努力で40通余の書信が発見された。目下残存する書信を整理編集し、「老舍書信集」として刊行の予定である。それらは次のように分類しうる。

1. 雑誌等への登載を期待するもので、文章はエッセイ、小説体である。「劍北篇附録——致友人函」「新疆半月記——致秦兆陽」等老舍の体験を語る。
2. 個人宛の書信であるがすでに出版物に転載されたもので、「致趙景深的一封信」、馬国亮氏が『良友画報』（1958、12月、香港）に紹介した「答友人書」等である。馬氏は抗日戦争中この老舍の書信を読み勇気づけられた人のことを紹介し、老舍の凛然とした正義心、筆致について語っている。  
周揚、郁達夫との通信、延安報告、滯米中の書信等を含む。
3. 友人知己に送った書信類の中には用件を語るだけではなく、行間に老舍の日常生活感情、創作、翻訳活動から得た思想が吐露されている。  
老舍研究の貴重な史料として一見の価値をもつ。  
（文責平松圭子）

## 老舍资料的新发现

舒 乙

一、“结婚证书”的发现：

1988年10月胡黎青先生搬家时，在旧箱底发现“婚书”一纸，外尺寸493×347mm，深红色，纸较厚，系“北平市政社会局制”的标准格式，上印金边金字，边宽13mm，金边内尺寸为385×246mm，边的四角各位一字，合起来是“百年合好”。书上字体皆为楷书体，分10×10与6×6mm两种大小，立写，繁体。中部盖有大金印，尺寸为64×64mm，

字迹已不可辨认。左上方贴有橘黄色印花票四枚，系壹角的“国民政府印花税票”，每枚上加印“河北北平”四个黑字，印花票上盖有两枚同样的紫色椭圆形章印，每枚覆盖两枚印花票，章印上字为“内二区署第二股”。

印刷的金字中留有空地，共53处，供填写用，印刷体金字共104字。

实际填写了51处，全都系老舍先生的笔迹，是毛笔正楷，共140字。订婚人以下每个人的名后都盖有私人印章，共九人次十枚，其中证婚人宝乐山先生的印章半重叠着盖了两次。

“婚书”正文如下：

“舒舍予行年三十四岁十二月廿三日酉时生河北省宛平县内四区 村人

父 舒关保 父 舒克勤 父 舒永寿  
曾祖母 舒马氏 祖母 舒孟氏 母 舒马氏

胡黎青行年二十七岁十一月廿七日子时生河北省宛平县内四区 村人

父 胡特智 父 胡贵德 父 胡竹轩  
曾祖母 胡怀氏 祖母 胡边氏 母 胡奚氏

今由罗莘田先生介绍订为夫妇此証

白滌洲

中华民国二十年四月四日

舒舍予 于二十年七月廿八日未时在北平报子胡黎青

街聚贤堂举行结婚礼由宝乐山先生証婚此証

订婚人 舒舍予

胡黎青

証婚人 宝乐山

介绍人 罗莘田

白滌洲

主婚人 舒子祥

胡竹轩

家 长 舒子祥

胡竹轩

中华民国二十年七月二十八日”

此婚书的发现有很大的档案价值，它报露了以下几点以前从未知道的事实：

第一，老舍先生和胡黎青先生曾祖父母和祖母的名字。以前只知道其双方父母的名字，这在一定程度上填补了两人家谱的空白。起码已把舒、胡两家的家谱的上限上推到了1800年左右，即嘉庆年间。

第二，訂婚是1931年4月4日。

第三，証婚人是宝乐山先生。相对来说，宝先生的名气不如黎锦熙教授大，但老舍先生坚持要宝先生当証婚人。宝先生既是他的恩人，又是好朋友，对他有巨大影响，虽是普通百姓，也非他莫属。这一点很能说明老舍先生把友情看得比什么都重，而且他有很浓的民粹意识。

第四，男方的主婚人和家长都由老舍先生的哥哥舒子祥先生担任。

第五，结婚时间精确到1931年7月28日午后一时。地点在西单报子街聚贤堂饭庄。

## 二、私塾所在地的发现：

念私塾对老舍先生来说是极重要的一段人生经历。他小时候家贫体弱，母亲有时想教他去上学，可是一怕受人家的欺侮，二因交不起学费，所以一直到七岁还不识一个字。老舍先生说：“说不定，我会一辈子也得不到读书的机会……一个十多岁的贫而不识字的孩子，很自然的去作小买卖——弄个小筐，卖些花生、煮豌豆、或樱桃什么的。要不然就是去学徒。”一个偶然的机会，刘寿绵大叔领着他上了私塾，给了他学钱、书籍和做衣服的布。

“没有他”老舍先生在《宗月大师》一文中写到：“我也许一辈子也不会入学读书”

对这个私塾，老舍先生在同上文中有过比较详细的描述：

“学校是一家改良私塾，在离我的家有半里多地的一座道士庙里。庙不甚大，而充满了各种气味：一进山门先有一股大烟味，紧跟着便是糖精味，（有一家熬制糖球糖块的作坊）再往里，是厕所味，与别的臭味。学校是在大殿里。大殿两旁的小屋住着道士，和道士的家眷。大殿里很黑、很冷。神像都用黄布挡着，供桌上摆着孔圣人的牌位。学生都面朝西坐着，一共有三十来人。西墙上有一块黑板——这是“改良”私塾。老师姓李，一位极死板而有爱心的中年人。刘大叔和李老师“嚷”了一顿，而后教我拜圣人和老师。老师给了我一本《地球韵言》和一本《三字经》。我于是，就变成了学生！”

对这座道士庙，虽然经过多方查找，始终未能发现。

1987年经过贵州大学法律系教授刘澄清先生的指点，终于找到了这座道士庙。

这座庙叫正觉寺，正觉胡同因该寺而得名，现门牌为“甲9号。”

正觉寺系明成化三年建的，至今还保存着两进大殿。如今是北京市五金工具中等专业学校的校舍，是西城区重点文物保护单位。

由小羊圈（小杨家）胡同沿着新街口南大街往北走，经过四条小胡同，第五条胡同便是正觉胡同，确实只有半里多路，而且无需横穿马路。

那座当教室的大殿也依然存在，如今也还是教室，黑板也依然是在西墙上。大殿的外墙上，东西两个房角上，还保留有两个砖刻大字，东“乾”字，西“坤”字。这大概是道士庙仅存的一点痕迹了。

据刘澄清先生回忆，其父刘厚芝，名庭茂，法号显亮，是刘寿绵的家馆师兄弟。光绪年间，刘厚芝先生在正觉寺里办了一座改良私塾，聘请其妻的妹夫李昆山为教师，这便是那位“极死板又极有爱心的中年人。”刘厚芝先生1961年去世。老舍先生曾写过四首诗纪念刘校长的夫人，他的师母，可惜这些首诗作已不存。

随着改良私塾旧址的被发现，和老舍先生青少年有关的学校所在地已全部被找到

## 三、三幅珍贵的字幅：

### 其一

1960年春老舍先生购得刘鹗书写的对联一付。联已残缺，遂请裱工刘金涛师傅裱修。刘师傅裱补后，老舍先生很满意，对刘说：“我给你写几个字，你要不要？”随即由书房里取出一小块“库绢”，写下如下的字：

“今春得刘铁云书联文曰  
今既见心即见佛子安知  
我不知鱼抱残书联不多  
见落笔简拙有甲骨文字  
气息 庚子端午  
金涛同志正  
老舍”

此“库绢”大约400×300mm，红底，上印有细金纹花鸟画，是宫中所藏专门用来写字画画的高级材料。

老舍先生的字有核桃般大小，很工整。选了一枚阴文的“舒”字印，先印在白纸上，然后剪下来，贴在库绢上，这样，解决了红印和红底之间的“靠”问题。

刘鹗的书联本不多见，老舍先生对刘鹗字的评语就尤显得珍贵了。

此字幅至今仍保存在刘金涛先生手中，他于1989年夏将此字幅裱成一个条幅，在老舍字的上方留了一小方纸，特请黄苗子先生写跋。苗子先生录了一首挽老舍先生的旧诗。诗曰：

“夫子文章伯  
堂堂作国殇  
剜头四凶殛  
弹指十年狂  
兰菊长无绝  
山花烂漫芳  
北门羞学士  
夫子烟辉光”

### 其二

画家黄永玉1953年曾为齐白石大师作木刻肖像一幅。一共印了三幅。一张赠白石老人，一张赠郑可，另一张赠刘金涛师傅。刘金涛所藏这张躲过了“文革”十年浩劫幸存了下来，又由刘金涛回赠给黄永玉。只见木刻上方有老舍先生题的“一代风流老画师 一九六二年冬初 金涛同志正”字样。其中“一代风流老画师”是七个大字。黄永玉大为感动，以为是件不可多得的宝物，又赠给了胡絮青先生保存。黄永玉在木刻上密麻麻地写了一篇小记：

“此余一九五三所刻，赠白石老人一张，金涛一张，郑可一张，金之一张则请老人加题，金涛所存文革后又归赠余收藏，赫然有舒先生题字，今持赠絮青先生，舒先生曾见白石翁为祖光作画流落敝肆，后收购候祖光东北劳改归来赠还之，人生美丽处即在此也。后学黄永玉 己巳年三月廿日于北京三里河”

这篇小记热情歌颂了老舍的为人，说“人生美丽处即在此也。”

一张条幅上，有木刻，有题字，有文章，涉及六位知名的美术师、工艺师和文学家，确实是一件不可多得的艺术珍宝。它的不同凡响之处是它的复杂的经历，和它包含的深刻的人生哲理启示。

### 其三

傅抱石先生和老舍先生是好朋友。抱石先生常有画赠给老舍先生。1960年初秋抱石先生作湘君图一幅寄赠。老舍视为奇珍。在一张325×293mm的灰兰色“庠绢”上用工整的毛笔字写了一段评语：

“抱石写山水之美最善用水  
笔下云烟万态飞泉林雨  
隐々有声其作人物则复简

劲务去见巧苦竹寒梅差拟

凝铄

庚子初秋抱石寄赠湘君图  
于朴拙中寓挺秀如犹奇珍敬题  
数语付装期日夕相对莫相忘也  
老舍于首都”

这幅字于1989年夏在老舍故居内被发现，未装裱，折叠几近断裂，遂求刘金涛师傅裱成镜心。

字下有后剪贴上去的章印一枚，系“舍予之印。”

老舍在文中对抱石先生的画作了极为概括的评语：一说他的山水画最善用水，有云烟万态，飞泉林雨 隐々有声的效果；二说他的人物画刚繁就简凝铄简劲，像苦竹梅一般。三说所寄的湘君图在朴拙之中藏蕴着挺秀，是一件奇珍。

文章的最后两句也十分感人。老舍先生表示要把湘君图装裱起来，以期日夕相对，不忘老友的情谊。

这是一篇集美术评论和抒情于一身的小文。写得很漂亮：文漂亮，字漂亮，纸漂亮，心地也是非常美丽的。

## 舒乙氏夫妻来日

平松 圭子

1989年11月7日から2週間にわたり、老舎の子息、舒乙氏と夫人于滨女士が来日した。今回の来日は林原グループの林原共済会理事長、林原健氏の招請により実現したもので、同会企画の「林原フォーラム'89『食と文学』——日中仏文学作品に現れた食文化」に参加、講演のためであった。フォーラムは11月10、11日の2日間、京都ルネサンスホールで開かれた。

舒乙氏のテーマは「老舎著作和食文化」。老舎の作品（小説）から具体的に北京の庶民の食へ物と飲食風景を挙げ、彼らに対する愛情を時にユーモラスに、時に哀感をこめて老舎は表現していること、中国文化にマイナスの影響を与えている舊い習慣への辛辣な批判、亡びゆく北京のしにせと、そこで働く店員たちへの哀惜を紹介し、老舎は物書きとしてかつての繁栄と快楽の世界の証人として書いたのである、と結論された。

東京では二度講演をした。

1. 「和日人力車愛好会会員們座談『駱駝祥子』」  
(11月18日、人力車研究会)

2. 「老舍資料的新発見」(11月19日、老舍を読む会)

19日の講演会は関東地区東京近辺の老舍研究会会員には連絡をお送りした。

胡絮青女士との結婚証書の発見により、舒家及び胡家の家譜の一部が明らかになったこと。老舍が通った私塾(西城区にある正覚寺)が見つかったこと。老舍はかつて劉駱の書聯を入手し、表装したが、それに合った表具師の技をたたえて書いた賛、傅抱石画伯が画いた「湘君図」を贈られ、それに書いた識語の三点が見つかったことを紹介された。

舒乙氏は元来化学者であるが、現在中国現代文学館副館長の職にあり、東京駒場の近代文学館や横浜の近代文学館を見学した。于滨女士も木材と菌類の研究をする化学者である。来日中は関西、東海、東京の諸会員に御協力をお願いした。この誌上を借りて、舒乙氏夫妻からの感謝の意をお伝えしておく。

## 老舍作品の最も早い翻訳

舒乙氏より昨日便りがあり、下記の切抜(出版史料, 1989, No.2, P.17)が同封されており、何か手がかりがつかめたらとのことでした。もし何かわかりましたら、舒乙氏か私あてに御連絡下さい。柴垣芳太郎('90, 3.10)

### 老舍作品の最早翻訳

老舍研究专家们“沿波溯源, 寻根振叶,”发现“老舍作品最早被纳入世界性的审美视野”是在1940年, 那一年12月日本兴亚书局同人翻译出版了老舍的《小坡的生日》, 这被认为是老舍作品的最早外译。

今有材料表明, 老舍作品之被翻译的时间很可能提前。在1937年4月1日的《文学》杂志第8卷第4期上, 刊有日本诗人五城康雄的来信。五城在华留居多年, 于1936年12月回国, 正在翻译老舍作品。他在信中问《文学》编辑:“仆现正在翻译老舍先生的文章, 至少这位作家的生平及著作等, 先生知之必较详细, 肯为仆作一介绍? 贵国有“老

舍论”一类的文章吗?”《文学》编辑王统照先生于1937年8月16日回信(亦刊于同期该刊), 简单介绍了老舍的生平等, 并说:“据老舍先生来函谓平生作品略称满意者, 长篇以《离婚》(幽默的)与尚未刊完之《骆驼祥子》(严肃的), 短篇以《蛤藻集》为较佳云。”

五城康雄的翻译未知发表了没有, 亦未知发表于何处, 很值得请日本的老舍研究者注意发掘一下。我认为, 即使当时没有发表, 那么, 这件轶事也仍可以说是“老舍作品之被纳入世界性的审美视野”的一则佳话。何况此事还与中国著名作家王统照有关, 甚至还惊动了老舍本人。而老舍对于自己一些作品的评价, 也是非常值得注意的, (福康)

## 老舍資料近刊(7)

### 1987年追加(2)

2. 「老舍研究会会報 第6号」 4月15日  
柴垣芳太郎「北京土産話」 P.1~2  
岡部謙治「『茶館』舞台上演の言語」 P.3~4  
「老舍資料近刊(4)」 P.4~9  
「昭和61年度研究発表会・総会」 P.9  
「老舍研究会会則」 P.9~10  
「役員名簿1986年7月19日選出」 P.10  
「事務局だより」 P.10
3. 「老舍研究会会報 第7号」 7月10日  
「曾広燦氏を迎えて」 P.1~3  
胡絮青・舒乙「《老舍与中国文化观念》序」 P.3~4  
「事務局だより」 P.4

### 1988年追加(2)

12. 天逸「抗战期间老舍致郁达夫的一封信」  
抗战文艺研究 第3期 10月 P.180~182

### 1989年追加

1. 『老舍文集 第14卷』 人民文学出版社  
2月 P.1~599
2. 「老舍研究会会報 第8号」 3月1日  
丁秀山「老舍誕生九十周年記念の夕べに参加して」 P.1~2  
日下恒夫「ある噂——竹中伸訳『駱駝祥子』をめぐって——」 P.2~4  
「老舍資料近刊(5)」 P.4~7

「事務局だより」 P.7～8

3. 高橋弥守彦・永吉昭一郎・大塚秀明「《茶館》の版本比較と時代考察 — 資料編(その1) —」 外国語学会誌18号 3月25日 P.154～185
4. 高橋弥守彦「『茶館』の版本比較と時代考察(その3)」 大東文化大学紀要27号 3月31日 P.445～462
5. 高橋弥守彦「『茶館』の版本比較と時代考察(その4)」 語学教育研究論叢6号 3月 P.65～86
6. 日下恒夫「『対』という考え方 — 老舎長編小説への覚え書き —」 中国文学会紀要10号 3月 P.142～156
7. 高橋由利子「老舎の文学と文学観 — 初期三部作と『離婚』について —」 藝文研究54号 P.217～235  
1989年(3)
21. 〔台湾〕艾华「试论老舎的宗教观」 中国現代文学研究丛刊 第2期 5月 P.260～285
22. 老舎原著舒悦翻译「关于《离婚》」 同上 P.286～289
23. 曾广灿「老舎研究的別一洞天」 同上 P.290～297
24. 王行之「老舎の青少年時代(二)」 燕都 第3期 6月4日 P.22～24
25. 刘诚言「老舎幽默論」 广西民族出版社 6月 P.1～288
26. 「老舎研究会会報 第9号」 7月10日 杉野元子「第四次老舎學術討論会について」 P.1～3  
「第四次全国老舎學術討論会参加記録」 P.3～4  
「老舎資料近刊(6)」 P.4
27. 甘海嵐『老舎年譜』 书目文献出版社 7月 P.1～522
28. 王行之「老舎の青少年時代(三)」 燕都 第4期 8月4日 P.39～41
29. 日下恒夫「小説家老舎 — 『猫の国』から —」 季刊中国研究 16号 9月 P.88～105
30. 王行之「老舎の青少年時代」 燕都 第5期 10月4日 P.18～19
31. 「22年前 老舎の碑がひそかに建てられていた」 人民中国 11月号 P.39

## 事務局だより

◇1989年7月15日、中京大学(名古屋学舎)において研究発表会が開催されました。発表者ならびに発表題目は次の通りです。

1. 老舎の戯曲にみられる語法上の特徴  
大田加代子氏(名古屋大学大学院)
2. 「小人物自述」に見える老舎の自伝観  
松村茂樹氏(筑波大学大学院)
3. 渡英以前の老舎  
杉野元子氏(慶応大学大学院)
4. 「茶館」成立考  
石井康一氏(神戸大学大学院)
5. 「猫城記」の評価をめぐって  
日下恒夫氏(関西大学)

◇研究発表の後、この大会の日程にあわせてお招きした舒济氏による講演が行われました。内容の概略等、本誌の平松圭子氏の記事をご覧ください。  
◇総会においては、会務報告・決算報告など、例年のごとく進められました。会員各位には改めて御案内申し上げますが、本年1990年度の研究発表会・総会は例年よりも期日を早めて、6月23日(土)に予定している旨、報告了承を得ました。多数の会員の御参加を願います。

◇総会の後、いつもの通り今池東天閣に会場を移し、懇親会が開かれました。今回は舒济氏を迎えて、とりわけにぎやかに行なわれました。

◇本年6月の研究発表会に研究発表を御希望の向きは、事務局まで御一報願います。

◇舒乙氏の住所が変わりました。新住所は、「中国北京100011、安定門外東河沿8号楼206」です。  
◇種々の事情で本号の刊行が遅れ、会員各位、また原稿を早くからお寄せいただいた方々にご心配をおかけしましたことを申し訳なく存じます。今後とも御協力を願い上げます。

老舎研究会会報第10号 (1990年4月25日)  
〒464 名古屋市千種区不老町 名古屋大学文学部中国文学研究室内 老舎研究会事務局  
(TEL 052-781-5111 内線2245)